

論 文

『緋文字』についての一考察

島田 由香（白百合女子大学大学院博士後期課程）

はじめに

ナサニエル・ホーソンの代表作『緋文字』は、1850年に出版された。作品の舞台は、17世紀半ばのボストン。ヒロイン、ヘスター・プリンは、不義密通という罪を犯した結果、罰として胸に緋文字をつけピューリタン社会から孤立した生活を送る。ヘスターは、神に対しては罪を犯したと感じているが、ピューリタン社会に対しては罪を犯したとは考えていない。作品の時代設定の時期は、ホーソンの祖先で歴史にその名を残したウィリアム・ホーソン⁽¹⁾、ジョン・ホーソン⁽²⁾ が生きた時代である。1630年にジョン・ウインスロップと共にアメリカにやってきて、クエーカー教徒へ激しい弾圧を加えたウィリアムやセイラムの魔女裁判に判事として関わったジョンについて、ホーソンは、作品の序章となる「税関」の中で以下のように言及している。

「彼は、軍人、立法者、裁判官であった。彼は教会の指導者であった。彼は、良きにつけ悪きにつけ清教徒の特質をすべて備えていた⁽³⁾」(SL12, 邦訳20)

「物語作家だと？人生とどうかかわる仕事なのか—神の栄光をいかに讃え同時代の人類にどのように貢献できる仕事なのか。あんな墮落した男はヴァイオリン弾きにでもなっていたほうがましだ。」(SL13, 邦訳21)

ホーソンは、作家であるホーソンについて祖先同士でささやきあう声を聞き取っている。17世紀は、厳しい掟を持つ神聖社会であった。ヘスターは、こうしたピューリタン社会において自己を信頼し、断罪する社会の人々の視線に耐え、ピューリタン社会の指導者である総督や牧師に対して、

娘パールを自らの手元において育てる権利を主張する。ホーソンが『緋文字』を執筆した19世紀中葉は、アメリカでは、産業革命の時期で、国が急速に発展していた。新しい芸術・文学運動としては、ラルフ・ウォルド・エマソンによって自己信頼の思想が出てきた。エマソンは、1837年に「アメリカの学者」という講演の中で、自己信頼を持ち、考える人になろうと述べている。エマソンは、「私たちは、自分の足で歩き、自分の手で働き、自分自身の心を話しましょう」と結んでいる。ヘスターの生き方は、このような思想を思い起こさせる。ホーソンは、エマソンの自己信頼をヘスターに投影しているのではないか。一方、ピューリタン社会の人々から尊敬される牧師ディムズデルは、「雄弁さと宗教的情熱」(SL105, 邦訳93)を持ち「ニューイングランド教会のため果たすように天命を受けた使徒」(SL105, 邦訳172)だと考えられている。その彼が、ヘスターの不義密通の相手で姦通の罪の共犯者である。

『緋文字』のヒロイン、ヘスターについての解釈は、多くの研究者によって語られている。リチャード・ローランドとマルコム・ブラッドベリーは、ヘスターの改心が「血の通った人間の優しさ⁽⁴⁾」を表していると述べている。トニー・ターナーは、ヘスターを「アメリカの芸術家の典型⁽⁵⁾」と述べ、リチャード・チェイスは、ヘスターは「永遠の女⁽⁶⁾」を表し、誤りやすい人間の現実を表していると述べている。ヘンリー・ジェイムズは、ヘスターは『緋文字』のヒロインではなく、ディムズデルこそが主人公であると述べている。

本稿の目的は、同じ罪を犯したヘスターとディムズデルが、いかに対照的な生き方をしたかを検討し、アメリカ文学で最もピューリタンの作家

と言われるホーソンが、ヘスターを通して何を表わそうとしたのかという点において新たな解釈を試みたい。

1. ヘスターの生き方

ホーソンによるとヘスターは、イギリスからオランダ経由で新大陸アメリカへ渡った。イギリス生まれで、チリングワースと言う学者の妻だった。チリングワースより彼女は先にアメリカにやってきたが、2年たっても夫から何の音沙汰も無い。それで若い細君ヘスターは、身をあやまたと説明している。ヘスターは、罪を犯してから7年後にジョン・ウィンスロップ総督の臨終に装束の寸法を取るため立ち会う。ウィンスロップ総督は1649年に亡くなっている。この事実から逆算していくと、物語の時間設定は、ヘスターがボストンにやってきたのは1640年ごろで、罪を犯し、処刑台でさらし者となるのが、1642年。ここから『緋文字』の話は始まり、1649年までの7年間を扱う物語であると考えられる。ヘスターが臨終に付き添ったウィンスロップ総督とは、1630年アーベラ号で「丘の上の町」の演説を行った人物であり、移住の目的を神の意思にかなう社会を作ることにあると自覚した人である⁽⁷⁾。彼に共鳴した人々がアメリカへ渡ってきた。マサチューセッツの建設者達は、新しい社会を作ろうと全力を挙げて植民地の形成に取り組んだ。彼らの中にホーソンの祖先がいる。ウィンスロップと共に移住してきたピューリタン、ウィリアム・ホーソンは、市議会の議長として植民地開拓に熱心に活躍し、クエーカー教徒への迫害をして、彼らに鞭打ちの刑を与えた。彼の息子、ジョン・ホーソンは、セイラムの魔女裁判に判事として関わっている。『緋文字』の7年間とは、ウィリアム・ホーソンやジョン・ホーソンが生きた時代と同時代である。彼らを含むボストンピューリタン社会の人々から、罪人として見られているのがヘスターである。人々は、獄舎の門から出てくるヘスターに当然、厳しい罰を望む。人々の態度には、一定の変わらぬ謹厳さがあつた。その人々とは、ピューリタン

社会の民衆であり、ホーソンは以下のように説明している。

「宗教と法律がほとんど一体をなし、しかも両者が公衆の性格の中で融合していたので、公の懲罰となれば、その軽量は問わずひとしく畏敬と畏怖の念をもって受けとめた民衆」(SL47,邦訳73) ピューリタン社会の民衆に、ウィンスロップの理想が染み渡っていたことも伺える。ホーソンは、ヘスターについて「完璧な優雅さ」「端正」「美しい」「豊かな黒髪」「ある種の威厳と気品」「聖母マリア像」「貴婦人」(SL50,邦訳77)と表現している。豊かな黒髪、黒い瞳を持つヘスターの聡明さと美しさは輝きわたり、姦通で厳罰に処される惨めなヘスター像はない。ヘスターは、厳しい顔つきの男性や意地悪そうな顔つきの女性達のさげすみの視線の中、堂々と毅然と歩むことによって自らの罪を恥じないことを示す。ヘスターの態度には、ピューリタン社会の集団に対するヘスターの反抗が見られる。ヘスターは、ピューリタン社会への挑戦的態度をとっているようである。ヘスターの胸に縫い付けられる緋文字Aは、姦通を意味する“Adultery”のAである。ピューリタン社会の人々から、姦通の罪を犯したしるしとして見られる。ヘスターは、当時の「奢侈禁止令」をはるかに逸脱する赤い布に金糸でAの文字を自らの手で刺繍し、風変わりな飾りで縁かがりをほどこす。目にも鮮やかな華やかな飾り文字Aは、ヘスターに似合っていた。赤子を抱き、顔を高潮させ毅然とした笑みを浮かべ臆すること無いまなざしで周りの人々を見回すヘスターからは、罪への後悔の無さを示す強さが見られる。豪華な金色のAの文字は、ピューリタン社会から強制的に罪人とされたと思っているヘスターの、ピューリタン社会への抗議の色とも取れる。

ヘスターの強さは、罰を受けピューリタン社会から疎外されても変わらない。ホーソンは、ヘスターの強さをしばしば1638年に追放されたアン・ハッチンソンと重ね「彼女は、アン・ハッチンソンと手をたずさえ、信仰宗派の女教祖としてその名を歴史にとどめることになったことだろう」(SL144,邦訳236)と表現している⁽⁸⁾。

論文

ウィンスロップが裁判長として行った裁判で、ハッチンソンは自分が信頼するジョン・コットンとその他の牧師との違いを指摘し、牧師の多くが道德生活を強調するがあまり「恩恵の契約」を忘れ「業の契約」によって救いが得られると間違った教えを説いていると批判した。ヘスターとハッチンソンは、共に自分の堅い信念は、曲げない。ピューリタン社会の基準に左右されない意思の強さも持つ。2人ともピューリタン社会の女性の道德観からは逸脱した行動を取る。最期は、ハッチンソンは、有罪で監禁され、森へ追放され、インディアンに襲われ死ぬという悲劇的な結末を迎えたが、対照的にヘスターは、森へ追放も無く、ピューリタン社会の人々から異端とされ、監視されながらもピューリタン社会にとどまり、清廉潔白な生き方が徐々に、ピューリタン社会の人々から認められる。ヘスターは暖かく豊かな女性らしい能力の持ち主として、頼りがいがある慈愛に満ちた修道女のようにみなされていく。ヘスターはピューリタン社会の人にとって「私たちのヘスター」(SL142, 邦訳233)となり、晩年には、虐げられ悩む女性達の相談相手になり尊敬される生き方をする。ヘスターとアン・ハッチンソンの生き方の違いは何か？それは、同じように自由な考えを持った二人だが、ハッチンソンの罪は、公然たるピューリタン社会への体制批判であり、ヘスターの罪は、姦通罪である。また、ハッチンソンの発言は、ピューリタン社会が進む方向についてであり、ハッチンソンの主張を認めることは、ピューリタン社会を築いてきた指導者達にとっては危険で、異端であり、自分達を脅かす脅威であった。ハッチンソンは、自らの固い信念を述べ、ピューリタン社会では尊敬される人々を批判した⁽⁹⁾。ヘスターの発言は、指導者達に、子供を手元に置いて育てたいという母親の権利を主張しただけである。男女関係についての考えは、あくまでも公の場で主張しない。「社会の全組織を解体」、「男性の本性そのもの、習慣を変える」(SL144, 邦訳237)といった考えは、ヘスターの胸のうちにしまっている。さらに、ヘスターの晩年には、男女関係における新しい変化は、「神の御心がこ

の世でも行われる天国の時代を迎える準備が整えば」(SL228, 邦訳382) だとして、穏やかな考えになっている。

当時ピューリタン社会では、さまざまな迷信が流行した。母親の思想が、子供の姿形にひとつの事実として出現すると考えられていた⁽¹⁰⁾。ハッチンソンは、15人目の子を奇形児で流産した。奇形だったことでピューリタン社会からは、ハッチンソンの信仰そのものが正しい形態でないとされた。一方、ヘスターの幼子パールは、確かに「悪魔の申し子」「罪を象徴する子」「生きた緋文字」と言われているが、パール自身は、墮落した罪深い子として登場はしていない。「生まれつきの気品」と「神の叡智」を備え、ウィルソン牧師から「小鳥」「妖精」(SL97, 邦訳156)「ルビー」「赤いバラ」(SL97, 邦訳157)と言われる。ホーソンの説明によると、パールは「母親の全てを賭けて手に入れたたった一つの宝物」(SL80, 邦訳127)という存在であった。

パールは、ピューリタン社会から疎外されたヘスターの生きていく上での支えであり、ヘスターの生活の中心は、あくまでも娘パールの養育である。ピューリタン社会の指導者達は、パールをヘスターから引き取り、パールが宗教的精神的に成長できるようにヘスターよりもふさわしい人物に育てられるべきだと提案する。これに対してヘスターは、今の自分は、パールを育てる為に生きて、その母としての権利を死ぬまで守り抜く覚悟だと考え、母親の権利を主張する。ヘスターの強い母性は、ヘスター自身を救うこととなる。ヘスターの母性は、ヒビンズ夫人からの森で魔王に会わせるという誘いも断らせる力を持つ。当時の人々は、森には悪魔が住み手先の魔女と共に、神の国であるピューリタン社会の転覆を企んでいると考えていた。コットン・マザーもこのことを信じていたほどである。ピューリタン社会の人々から黒魔術に手を染めると噂され、「魔女の老婆」と呼ばれているヒビンズ夫人に向かって、ヘスターは以下のように答える。

「私は家にいて、パールを見張っていなければ

なりません。もしあの子が取り上げられていたのなら、喜んであなた様と行って魔王様の帳簿に署名をしかも生き血で、してきたところですけど」(SL103, 邦訳167)

ホーソンは、パールを育てるヘスターの生き方に豊かな母性を加えている。また、ヘスターは、パールに対してピューリタンとして聖書によって示された真理を重視し、日常において教育していたことが以下のことからうかがえる。

「敬虔な家庭の娘だったヘスター・プリンは、天の父について子供と話せるようになるとすぐ、どんなに未熟な成長段階であっても、人間の精神が大いに興味を抱いて吸収する真理の数々を子供に教えたからである。そのせいでパールが3年という生涯に獲得した知識はかなりなもので、ニューイングランド初等読本やウェストミンスター教義問答の第一段あたりについて立派に試験を受ける資格があるほどだった。」(SL99, 邦訳159)

ピューリタンは、日常生活の指針として聖書を読む事、牧師の説教が理解できること、これらの能力を子供達が持つように教育することを家庭の義務とした。ハッチンソンの場合は、牧師を攻撃し自分の主張の根拠を神から直接受けた靈感にあると言った。ピューリタンの主張は、聖書の言葉を通じて、神の恩恵は示されるとする。ホーソンは、ヘスターが、現状の不満や指導者への恨み言をパールに教え込むのではなく、ピューリタンとしてパールに幼いうちから聖書と共に教育している点を描いて、ハッチンソンとの決定的な相違点とした。

ヘスターは、針仕事をしてパールを育てる。父親不在の家庭で、母親がしっかりと生活の糧を得て生きていく。ヘスターがハッチンソンと大きく異なる点は、ヘスターが針仕事を通して家庭を守り抜いた点である。18世紀「共和国の母」としてアメリカ女性を位置づけ「家庭」を聖域とみなしていた頃、針仕事をする女性は、家庭的女性の象徴であり、母親は聖域を守る天使になぞらえられ

ていた⁽¹¹⁾。ヘスターも、美しさと強さと聖母マリアのような慈愛で貧しい人々には針仕事を通して奉仕した。ピューリタン社会の人々からは「天使」と思われるようになった。ヘスターの生き方は、ピューリタン社会に受け入れられる方向へと進んでいく。ヘスターが変化したのではなく、ピューリタン社会の人々の見方が変化していく。ヘスターの緋文字Aを、「天使」AngelのA、「有能」AbleのAとして見るようになる。さらに、虐げられた女性達の相談にのるヘスターの緋文字Aは、以下のように表現される。

「ヘスターの一生を形成した苦勞の多い、思いやりにとんだ献身的な年月が経過するうちに緋文字は、世間の嘲笑と顰蹙を買う烙印であることをやめ悲しむべき何かの象徴になり、畏怖を覚えながらも尊敬を持って眺めるべき象徴となりおおせたのであった」(SL227, 邦訳381)

ヘスターは、ピューリタン社会において姦通を犯した女性として罰を受け胸に緋文字をつけて一生生きた。ホーソンは、ボストンについてヘスターに語らせている。

「この土地は、私が罪を犯した場所、だからこの世の罰を受けるのも、この場所でなければならず、それに、きっと、日ごとの恥辱の苦悩のために私の魂は清められ、受難の賜物であるだけに聖者にも似た、先に失ったのとは異質の新たな純潔を獲得するだろう」(SL73, 邦訳115)

3時間さらし者となった後は、ピューリタン社会から離れてどこに行ってもよいとされていた。しかし、彼女はとどまる生き方を選んだ。先祖の行為に罪の意識を持っているホーソン自身も「税関」において、先祖の呪縛から逃れる為、セイラムから出て暮らすと言う選択肢もあったことを述べている。

「私は宿命にとらわれていたのだ。私はもう帰るまいと思ったのも一度や二度ではなかった……ど

論文

うしようもなくそこへ戻ってしまうのだった」
(SL14, 邦訳23)

ホーソンは、罪を犯した場所に執着したヘスターの中に自分自身を投影している。ヘスターは、ディムズデル亡き後にいったん、ヨーロッパへパールと共に戻る。ヨーロッパでパールを育て上げ、再びヘスターは、アメリカへやってくる。ピューリタン社会に住む為、ヘスターは、自らの意思でまた緋文字Aをつける。ホーソンは「結び」においてヘスターが、自分自身のことを罪に汚れ、恥にうなだれ、一生の悲しみを背負った女だと自覚していると書いている。ピューリタン社会に戻ってきてから死ぬまでつけた緋文字Aの文字は、ピューリタンとして罪から逃れずに罪を犯した場所、アメリカに帰ってきた新生アメリカ人としてのAmericanのAだと思える。緋文字Aは、Americanであると同時にAdviserの意味を示している。ヘスターは、新しいアメリカ人として、またアメリカ女性達の悩みを共に考え、アドバイザーとして女性達を励まし慰めた。

ホーソンは、ヘスターの生き方の中に、エマソンの教えを地でいくかのように、ヘスターに自由で、個人的な世界の獲得をさせたり、アン・ハッチンソンのような女性活動家のような思考を持たせたり、母性豊かなマリアのような女性らしさを見せたり、さまざまな人間の姿を投影し、彼らの生き方の中にあるアメリカを象徴している。それ故、ヘスターの生き方には実に人間らしい喜怒哀楽がある。

2. ディムズデルの生き方

ディムズデルの立場は、ヘスターと対照的である。

ヘスターは、不義の子パールの父親の名前を言えば、緋文字を取ってやるとまで言われても、相手の名前を言わない。父親の名前を明かしなさいと説教しているのは、アーサー・ディムズデルである。彼こそヘスターの罪の共犯者である。彼は、イギリスの高名な大学を卒業して聖職者とし

て植民地へやってくる。雄弁であり宗教的情熱もありピューリタン社会の人々からの信頼を集め社会的にも高い立場にいる。ホーソンは、彼をピューリタン社会の人と同じ宗教的情熱と理想に燃えた人物として説明している。本来、ヘスターと共に同罪で裁かれる側の彼は、裁く側の人間として、しかもピューリタン社会の指導者として登場する。ディムズデル牧師は、素晴らしい容姿を持ちながらも、常に、怯え恐れ心配そうな気配を漂わせている。ディムズデルには、自ら罪の告白など、恐ろしくてできないのである。ディムズデルは、自ら、ヘスターの共犯者だということをピューリタン社会の人々の前で明らかにする意思も勇気も持たなかった。ディムズデルの苦悩は、胸に手をやり文字を隠すような動作が癖になっていることに暗示されている。ある夜、ディムズデルは、悔い改めの真似事を1人で処刑台に立って行く。そこにウインスロップ総督の臨終に立ち会い帰宅途中のヘスターとパールに会う。三人で処刑台に立ち手をつなぐ。パールに「明日のお昼、お母さんと私と一緒にここに立ってください。」(sL134, 邦訳219)と問いかけられても、ディムズデルは自分の秘密が世間に知られることへの恐怖心で怯える。そこに夜の闇の中、一条の光が空に輝きわたる。17世紀ピューリタン社会においては、さまざまな迷信が流行した。神秘的現象が魔術、呪術、降神術として出現した。流星、太陽や月の出没などにおいても、規則的ではないことに対して何かしらの啓示があると解釈されていた。闇夜に昼間のような明るさをもたらした光は、胸に手を置く牧師と緋文字をつけたヘスターと2人にとって生きた緋文字であるパールを照らし出す。光は真実を浮かび上がらせた。3人で並ぶ姿こそが真実の家族の姿だからだ。空には、赤い線で描かれたAの文字が浮かび上がっている。ピューリタン社会の人々にとって、空に浮かび上がったAの文字は、その夜、ウインスロップ総督が亡くなったことから、AngelのAとして解釈されたが、ヘスターとディムズデルの二人にとっては、Aは、adulteryを再確認させる文字である。真実を暴く光は、夜の他に森にも差し込

む。ヘスターとパールが行った森に一条の光が差しこむ。しかし、光はパールにだけまわりついて、ヘスターや同じく森を散策していたディムズデールには当たらない。ヘスターやディムズデールに光が当たらないのは、彼らが真実を語っていないからである。

「森」は、ピューリタン社会の人々から魔女とみなされているヒビンズ夫人が度々森に行き事を口走るようにピューリタンにとって森は悪魔が支配する世界に他ならない。ハッチンソンも裁判で森へ追放された。森に追放することは死刑を意味した。またホーソンの短編「優しい少年」でも、最後にはクエーカー教徒の少年は絞首刑に、母親は、森へ追放となった。ピューリタンが嫌う森は、秘密を持つディムズデールとヘスターにとって解放感を感じる空間となっている。

秘密を持ち続けるディムズデールが、大きく変わるのが森の中でのヘスターとの再会である。ヘスターは、ディムズデールに自分達の過ちについて「それなりの神聖さ」があったと言う。ピューリタン社会の指導者達から見れば、姦通罪の罪人に「それなりの神聖さ」など認められず、ディムズデールの見解も他の指導者たちと同じである。ディムズデールにとって、自分が犯した罪は、自分の「動物的」性質によって犯した罪であり否定すべきことであった。しかし、ディムズデールは、森でヘスターに会い自分の心情を告白していくうちに、ディムズデールは、自分の「動物的」性質によって犯した罪の結果の子であるパールを否定しなければならない、決してパールの存在を喜んではならないと強いていた自分に気がついた。彼の生き方は変化していく。暗い森から、ヘスターの誘いに乗ってヨーロッパのどこかへと船で逃げ出さなかった。自分を敬い信頼してくれている人々のいるピューリタン社会へ戻っていく。新総督就任の日に希望あふれる説教を行い、その後、自分がパールの父親であることを処刑台の上から告白した。ディムズデールは、牧師のたれ襟を引きちぎり、人々に胸の緋文字を見せた。そして、罪を悔い改めた。勝利の笑みを浮かべながら、ディムズデールは息絶える。この生き方こそ

ディムズデールにとって「神の御心」にかなう生き方であったのではないか。

ディムズデールの胸に、ヘスターと同じ緋文字Aを見たという大勢の目撃者がいた。

しかし、きわめて尊敬すべき人たちの証言により、ディムズデールの胸には生まれたばかりの赤子のように何の印も無く、さらには、ディムズデールは、ヘスターとの関係を認めてはいなかったと主張した。この「きわめて尊敬すべき人たち」とは、ディムズデールの友人であるウィルソン牧師とベリンガム総督である。ベリンガム総督は、ディムズデールが亡くなって日に就任し以降3回総督を務めた人物であり、ウィルソン牧師は、ボストン第一教会の牧師でありインディアンの強化に力を入れた人物である。ホーソンは、ヘスターの腕に抱かれ息絶えたディムズデールは以下のような人間だと記している。

「緋文字の上に降り注いだ真昼の太陽のように明白な証拠によって、彼が欺瞞に満ち罪に汚れた塵芥のような人間であることが証明されている」(SL227, 邦訳376)

しかし、ウィルソン牧師とベリンガム総督は、同じ牧師である友人ディムズデールの人格を守ろうとした。ピューリタン社会の指導者達によって、ディムズデールの死が、「我々は等しく罪人である」という寓話に仕立て上げられた。この寓話がピューリタン社会で通じてしまうことは、いかにピューリタン社会の指導者達の力が大きかったかが伺える。確かに指導者達に逆らったハッチンソンは、追放されたが、ベリンガム総督の妹であるヒビンズ夫人は、裁判にも厳罰にも処せられていない。総督の妹と言う身分で守られ、捕まるどころか、贅沢な衣装で自由に森を行き来していた。しかし、ホーソンによるとヒビンズ夫人は、ディムズデールが亡くなった年から数年後には魔女として処刑されたと記されている。ヘスターも、晩年は、男女間の関係について自分の意見を「胸のうち」に納めず女性達に語り慰め励ましていた。以前は姦通罪を犯したヘスターを無視して

論文

いたピューリタン社会の女性達も、ヘスターの小屋に行って、ヘスターに身の上相談をする。これらの変化はなぜ起きたのか？変化のきっかけは、作品の12章「牧師の勤行」で触れられている。ウィンスロップ総督の死によっておき始めた。初代マサチューセッツ植民地総督ウィンスロップは、神政政治の中心的人物である。彼が生きている頃の裁判は「神の判断力」を授かった総督と牧師が法的にも最終判断をして罰を決めていた。1649年にウィンスロップは死去し、1652年にはジョン・コットンも死去する。1652年にはコットン亡き後、裁判の判決は、総議会の多数決で決めることになり公正になっていく。ホーソンは、ウィンスロップ死去の章で亡くなった夜空を以下のように表している。

「雲の低く垂れ込めた空一面に光がきらめいた。それは間違いなく、夜空を眺めるものがしばしば目撃するように、流星のひとつが大気圏の虚空で燃え尽きたせいであった」(SL135, 邦訳220)

この流星のひとつとは、まさにその晩、死去したウィンスロップを指しているのではないか。1652年12月のジョン・コットン死去のときにも流星が観察されたと言う記述がある。当時は流星やその他の自然現象の出現は、超自然的なるものの啓示であると解釈された⁽¹²⁾。例えば、弓、槍が夜空に浮かべばインディアンの襲撃を警告するものであった。信憑性はどうか、信じるピューリタン社会の人々についてホーソンは、以下のように説明している。

「国の運命が天空に描かれる象形文字によって顕現するというのはまことに壮大な考えである。こういう考えをわれわれの先祖が好んで抱いたのは未だに幼い自分たちの共和国が格別に親身で厳しい天の加護にある証拠であると考えたからだ」(SL136, 邦訳222)

流星の後に夜空には、赤い光で縁取られた巨大文字Aが現れる。夜空に浮かんだ赤い文字Aは、

ディムズデルにとっては、自分の罪を表すAdulteryのAを意識させる。ピューリタン社会の人々は、ウィンスロップ総督が天使になったと解釈し、文字をAngelのAと捉える。しかし、ピューリタン社会にとっては、総督亡き後、神権政治が崩壊し、新しく歩み始める新しいアメリカを予言するAだと考えられる。

まとめ

ホーソンが描いた『緋文字』は、架空の要素をできるだけ排除し、場所、人物、時間設定も資料に即して描いている。ニューイングランドの風土に浸り、先祖のピューリタンと切っても切れない絆を感じているアメリカ人作家として、『緋文字』には歴史的事実の裏づけが必要不可欠なものだと考えたからである。ピューリタン作家ホーソンは、興味深い試みをしている。ひとつは、ホーソンは、『緋文字』を17世紀ピューリタン社会の实在の人物の登場によって展開している。ホーソンは、ヘスター・プリン、アーサー・ディムズデルの生き方を通して、アメリカ社会の原型と言うべき17世紀のピューリタン社会を描いた。2つ目は、『緋文字』はヘスター・プリンという女性が主人公であるという点である。19世紀のアメリカ文学は、「女性不在」の文学の時代であった。当時の国民的作家であるマーク・トウェインも女性主人公は残していない。そのような中、ホーソンは、ヘスターを主人公にした。実際17世紀には、ジョン・コットンが「女性は度重なる出産において死に近い体験をするので彼女達の信心深さは男性よりも大きいように感じる⁽¹³⁾」と指摘した。同様にホーソンは、ピューリタンとして新たな視点で女性に注目して、女性の悲しみ喜び、男性以上に苦悩を背負って生きている女性を表したといえる。

【注】

- (1) ウィリアム・ホーソンは、ジョン・ウィンスロップと共に1630年イギリスからマサチューセッツ

湾植民地にやってきて、セイラムに定住した軍人であり立法者であり裁判官で教会の指導者であった。ウィリアムは、イギリス国王チャールズ2世の命令に反抗し、またクエーカー教徒迫害を行った。ホーソンの短編「メイン・ストリート」には、ホーソン大佐の許可のもとにクエーカー教徒の女性が、鞭で打たれ、腰からうえを裸にされて馬車で町の本通りを引きずりまわされる場面がある。また、「優しい少年」では、クエーカー教徒というだけで迫害される母と息子を描いている。ナサニエル・ホーソンは、ピューリタンのクエーカー教徒迫害を激しく告発している。先祖との関係を切りたくHathorneのつづりに“w”を入れたのはナサニエル・ホーソンである。

- (2) ホーソン家2代目のジョンは、セイラム魔女裁判の判事の一人であった。少なくとも絞首刑の執行に18回立ち会ったとされている。
- (3) テキストは、Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter* (London: Penguin Books, 2003) 日本語訳は八木敏夫訳『緋文字』（東京：岩波書店、2006）から引用。以降、参考箇所原文と邦訳の頁数を（SL12, 邦訳20）のように表記する。
- (4) Ruland, Richard. and Bradbury, Malcolm. *From Puritanism to Postmodernism* (New York: Penguin, 1992) p.145
- (5) 鷲津浩子『文学する若きアメリカ』（東京、1989）111頁。
- (6) 曾我部学『アメリカ・ピューリタニズム系譜の作家達』（文化書房、2005）
- (7) ウィンスロップ総督は、新約マタイからの言葉「汝らは世の光なり。丘の上の町は隠れることなし」から「丘の上の町」と言った。以降ボストンの町を表す言葉となった。
- (8) ヘスター・プリングアン・ハッチンソンをヒントに作り上げられていることは、多くの研究者によって語られている。またヘスターとハッチンソンの女性という点に注目し女性らしさの概念についての論考もある。 斉藤忠利編『緋文字の断層』（東京、2001）53-55頁。
- (9) Perry Miller, *The New England Mind the Seventeenth Century* (London, 1939)

pp.388-391。ハッチンソンの批判は、極端であったが、やがてニューイングランドのピューリタニズムは、ハッチンソンの指摘した方向に進んでいった。

- (10) 当時は、生まれてくる赤子に、母親の思考が生きて写しで表れると信じられていた。ヘスターも、自分の行為が悪であることを承知していたので、パールが成長していく中、自分の罪に呼応する何か暗く奔放な特性が、パールの中に出てくるのかもしれないと不安で常に怯えていた。
- (11) キャロル・F・カールセン著、瀧田佳子訳『ウィメンズ・アメリカ』（ドメス出版、2002年）41頁。
- (12) 大下尚一編『ピューリタニズムとアメリカ』（南雲堂、1987）127頁。
- (13) キャロル・F・カールセン著、瀧田佳子訳『ウィメンズ・アメリカ』（ドメス出版、2002年）第1章「女の姿をした悪魔」13頁

【参考文献】

- Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter*, New York: Penguin, 2003.
- Miller, Perry. *The New England Mind the Seventeenth Century*, London: The Belknap Press of Harvard University Press, 1982.
- Ruland, Richard. and Bradbury, Malcolm. *From Puritanism to Postmodernism*, New York: Penguin, 1992.
- 青山義孝『ホーソン研究』英宝社、1991。
- 入子文子『ホーソン・緋文字・タペストリー』南雲堂、2004。
- 亀井俊介『アメリカ文学史講座Ⅰ』南雲堂、1997。
- 斉藤忠利『緋文字の断層』開文社、2001。
- 斉藤光『エマソン全集・自然について』日本教文社、1960。
- 曾我部学『アメリカ・ピューリタニズム系譜の作家達エドワード、エマソン、ホーソン、メルビル』文化書房博文社、2005。
- 向井照彦訳、ペリー・ミラー『ウィルダネスへの使

論文

命』英宝社、2002。

山本雅 『アメリカ社会の批評家としてのホーソン』
溪水社、1997。

山本典子 『ホーソンの作品における女性像』溪水社、
2003。

A Study of *The Scarlet Letter*

Yuka Shimada

Nathaniel Hawthorne's *The Scarlet Letter* was published in 1850. This story revolves around Hester Prynne, who is convicted of adultery in Puritan society by Puritan authorities. Hawthorne describes the effort to resolve the torment suffered by Hester and co-adulterer, the minister Arthur Dimmesdale, in the years after their affair. I will examine the life of Hester. I will compare the two lives of Hester and Dimmesdale. Hester is condemned to wear the scarlet letter "A" on her chest as a permanent sign of her sin. For Puritan society, in those days, "A" means adultery. But Hester devotes herself to troubled people. People consider Hester to be "Our Hester". The meaning of "A" changes to "Angel". After Dimmesdale's death, Hester returned to Europe with pearl. But Hester alone came back to Puritan society. Lately, "A" means "Adviser" for American women. Hester came back to America as a New American woman. At the end of the story, "A" means "America".

Hawthorne pointed out two things about American literature of 19th century. First of all, he described Puritan Society through the two lives of Hester and Dimmesdale. Secondly, he described an American woman as a heroine.